

中国の学生の動き（ハンガー・ストライキ）

平成元. 5. 18.

中 国 課

1. 現状

ゴルバチョフ訪中の機会にあわせ13日より天安門前で続けられているハンガー・ストライキは、17日夜、ここ1カ月以来最大規模（100万人）の知識人、一般市民の支援デモ、集会に発展。地方にも波及。指導者名指し批判も。

他方、当局側は学生との「対話」（14、15日）、趙紫陽の書面談話（17日）により説得を試みるも効を奏さず。この間、「ゴ」の日程の一部変更（中止、場所変更等）を強いられる事態も発生。（18日朝、趙紫陽、李鵬等、学生を病院に見舞う）

2. 学生の動きが幅広い支持を得、拡大した背景

- (1) 特権階級に見られる腐敗、汚職への反対等学生の要求への心情的支持。（一般市民の現状への不満の大きさを示す）
- (2) インフレに苦しむ都市住民の不満。
- (3) 「民主」、「自由」に対する一般市民の理解度が進み、学生を支持。
- (4) ハンガー・ストライキという非暴力的な方法に対する同情。
- (5) 「皆も行くから」という群衆心理。（子供連れ、笑顔も見られた）

3. 当局が強硬手段をとっていない背景

- (1) ゴルバチョフ訪中中であり、1000名近い外国プレスが北京に集中。
- (2) 一般市民の幅広い支持を得ているため強硬手段を採り難い。
- (3) 学生の要求が現行の施策と一致。（腐敗、汚職反対、民主化）

4. 見通し

- (1) 短期的：「ゴ」の帰国後、当局側は、学生の要求に対し一部具体的譲歩を行い、運動は暫時収束。
- (2) 長期的：学生の要求は突き詰めれば「民主」、「自由」であり、これの政策面での実現は時間を要するので、今後もなんらかのキッカケにより再発。
- (3) 指導部人事への波及

今回の事態の背景には鄧小平の長期“独裁”に対する一般大衆の反感が相当根強く存在するとみられる。鄧が中ソ首脳会談後引退するとの噂が従来よりあるが、今次学生の動きが直接引き金になることはないにしても、鄧引退を早める要因になる可能性あり。

他方、趙紫陽は鄧小平と学生の板ばさみという困難な立場で収拾に苦勞しているものと見られるが、慎重に集団指導体制を踏まえ学生には柔軟な対応を示していることから、趙批判に発展することはないと思われる。